

学 位 論 文 題 名

歌による天皇神話の形成

学位論文内容の要旨

天皇を神であるとする思想は、日本の天皇制古代国家の存立基盤をなす中心的なイデオロギーであったが、その形成の過程や背景、形成時期をめぐって、一定の歴史像が定着したとは言い難い状況にある。本論文は、近年、壬申の乱（672）以降に急速に確立されるに至ったと見られる天皇神格化イデオロギーの展開過程において、柿本人麻呂ら宮廷歌人による和歌が、単に時代の流れに竿さしてその形成の一翼をになったというだけでなく、むしろ「天皇神話」の形成に先導的な役割をはたしたことを立証せんとした、万葉集研究における従来の通念を逆転させる試みである。

第1章は、天皇神格化のイデオロギーと密接な関係を有する「アメノシタ」なる語の用法の考察で、アメノシタの用例の検討を通じ、この語がもともと漢籍語「天下」の訓読に起源を発しながらも、天武・持統による統一王権の確立に伴って包括的な天皇の支配領域を表わす語として確立した過程をとらえ、次いで、記紀風土記においては、「人の世界」だけをアメノシタと呼んでいることを確認し、さらに万葉集においてもこうした語の使い分けがみられること、中で柿本人麻呂だけが特異な用法を示すことを論証する。

第2章は、天皇神格化表現の中核を担った柿本人麻呂の諸作品の詳細かつ厳密な分析を通じて、その展開過程をあとづけたもので、人麻呂がその作歌活動の初期から記紀に具現されるに至る朝廷の神話とは異なる独自の神話の可能性を模索していたこと、各作品の制作事情や主題に応じて、様々な方法を駆使して天皇を神と歌うことの困難さと対峙し、それを徐々に実現していったこと、記紀神話には見られない天武始祖神話（天武が直接に天上世界から降臨した神＝皇祖だとする）を創造し、さらには天武皇統の後継者たちをも神として歌い、独自の天皇神話を確立したことを論ずる。

第3章は人麻呂の歌業を継承する奈良朝の歌人たちによって天皇神格化の表現がいかに関進され、和歌による天皇神話が完成に至ったかを考察したものである。聖武朝の吉野讃歌において山部赤人が人麻呂の吉野讃歌を継承しつつ持統天皇の治世を「神世」と歌い、当代の天皇に神聖性を付与しようと試みたことを論証し、家持作品における天皇神格化表現が人麻呂、赤人を受け継ぎつつ、それらとは異なり、直接に現天皇を天上界から降臨した神として表現することにより、天皇神話を完成させた、とする。

# 学位論文審査の要旨

|    |     |    |    |
|----|-----|----|----|
| 主査 | 教授  | 身崎 | 壽  |
| 副査 | 教授  | 河内 | 祥輔 |
| 副査 | 教授  | 南部 | 昇  |
| 副査 | 助教授 | 後藤 | 康文 |

## 学位論文題名

### 歌による天皇神話の形成

審査委員会は、本論文提出後、論文を精読し、また口述試験を実施し、その結果について審議し、適正な評価に努めた。その結果、以下に述べるような本論文の評価に鑑み、全員一致して、遠山一郎氏に論文博士（国文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達し、研究科委員会に報告した。研究科委員会はこれに基づき慎重な審議を重ね、これを承認したものである。

本論文において検討された、和歌による天皇神格化表現の問題は、壬申の乱の評価、天皇制の成立などの課題とからまって、学界に大きな波紋を投げかけた、万葉集研究の最先端を行く課題である。本論文に収められた遠山氏の諸論考は、作品の一つ一つについて徹底的な検証を行ない、和歌による天皇神格化の推進の実態を究明したもので、画期的業績といえることができ、近年の学界をリードしてきたといえるであろう。またとくに、柿本人麻呂において天皇神格化表現が様々な試行錯誤を経て徐々に確立していったこと、山部赤人、大伴家持ら奈良朝の歌人がそれを継承して遂に天皇神話を和歌表現において完成させたことを跡づけていった点は、古代和歌表現史だけでなく、上代日本人の精神史の業績としても高く評価できるものである。さらにまた、各節をなす論が近年の万葉集研究の分野において個別の作品論としても高い評価を受けた業績であることはいうまでもない。

今後、いやしくもこの問題に関わらんとする研究は、本論文を無視することは不可能であり、継承すると批判するとかかわらず、本論文を基点として検討を重ねていくことを義務付けられるであろう。また、万葉作家研究、作品研究の分野に限っても、今後の研究は遠山氏の見解を正當にふまえてこれを乗り越えていくことを必要としよう。